

2. 玦状耳飾

川上B遺跡D地区より出土した滑石製玦状耳飾は、今日までに、道内で発見されている玦状耳飾とは、形状や伴出土器の時期等の点で異なるものである。そこで道内の玦状耳飾との比較検討を行い、川上B遺跡の玦状耳飾の意義をさぐってみたい。

1) 川上B遺跡D地区出土の玦状耳飾（図Ⅸ-2-1、図版Ⅵ-11-1～3）

D地区は標高9～12mの地点にあり、中央に古い沢が入っている。玦状耳飾はその北側東端の標高10m付近、DH-1・2・5、DP-3に三方をかこまれる場所の、Ⅳ層をもえぐった風倒木痕状の落ち込み下層部から出土した。薄橙色を呈する滑石製で、高さ3.2cm、復元推定幅3.6cm、厚さ0.6cm、孔の長さ1.1cm、切れ込みの深さ1.0cm、現重量3.5gの半欠品である。形状の特徴は、平面形がやや横長の下膨れで、切れ込み裾部が急に開く形を呈し、断面形は下端から上辺に向かい徐々に厚みを増し、孔の上端で最大厚となる凸レンズ形をしている。切れ込みが浅く、中央孔は珍しく縦長方形をしている。半欠品によくみられる補修孔のような上辺部の小孔は無い。これらの点は、従来本道で発見されている玦状耳飾とは異なる特徴である。上記落ち込みからは、他にIb-1類土器の破片を利用した、有孔円盤とその未製品が出土しており、これと玦状耳飾との関連も注意を要する。またこの落ち込み内やその付近で出土した土器は、Ib-3類が大半で、出土状況からは縄文時代早期後半のものと思われる。

2) 形状の比較

次にこの特異な形状を、北海道出土の他の玦状耳飾と比較してみる。まず中央孔の形状は、『北海道原始文化聚英』に写真掲載されている2点のうちの一点(図Ⅺ-20-16)に角孔らしき様相がみられるのと、森越遺跡土の一点(図Ⅺ-2-10b)の菱形孔、計二点以外は、円孔またはそれに近い孔形を呈しており、川上B遺跡出土品との類似点は見い出せない。大きさは、平面隅丸三角形を呈すものとは、厚さが比較的薄いということで近似し、円形のものとは平面寸法が近似しているが、総合的にみると異なるものである。あえて形状で類品をさがせば、栗山町北学田の長円形のもの(図Ⅺ-2-7)が平面形では最も似ている。全般に出土状況に不明な点が多く、比較検討が難しいが、装飾品、祭祀品が周辺から出土しているものが多い。問題は伴出土器の時期で、当遺跡のものは早期後半の土器の伴出がみられるが、他は前期またはそれ以降のものが大半であるという点である。次項でこれら問題点を検討してみる。

3) 北海道における玦状耳飾の特色

これまでに北海道で発見された玦状耳飾の形状は、隅丸三角形又は等脚台形のもの、ほぼ円形のものに大別される。概して前者が後者より薄く、大形である。森越遺跡の五角形状のもの(図Ⅺ-2-10a)と、吉井の沢1遺跡の隅丸長方形のもの(図Ⅺ-2-2)、入江貝塚の卵形のもの(図Ⅺ-2-17)が、やや形状を異にしている。また前述したように中央孔は川上B遺跡と出土地不明の方形、森越遺跡の菱形、吉井の沢1遺跡の瓢形?を除けば円孔である。平面形が、円形を呈すものが川上B遺跡出土品を除いてすべて完形であるのに対し、類三角形のものが、寿都3遺跡

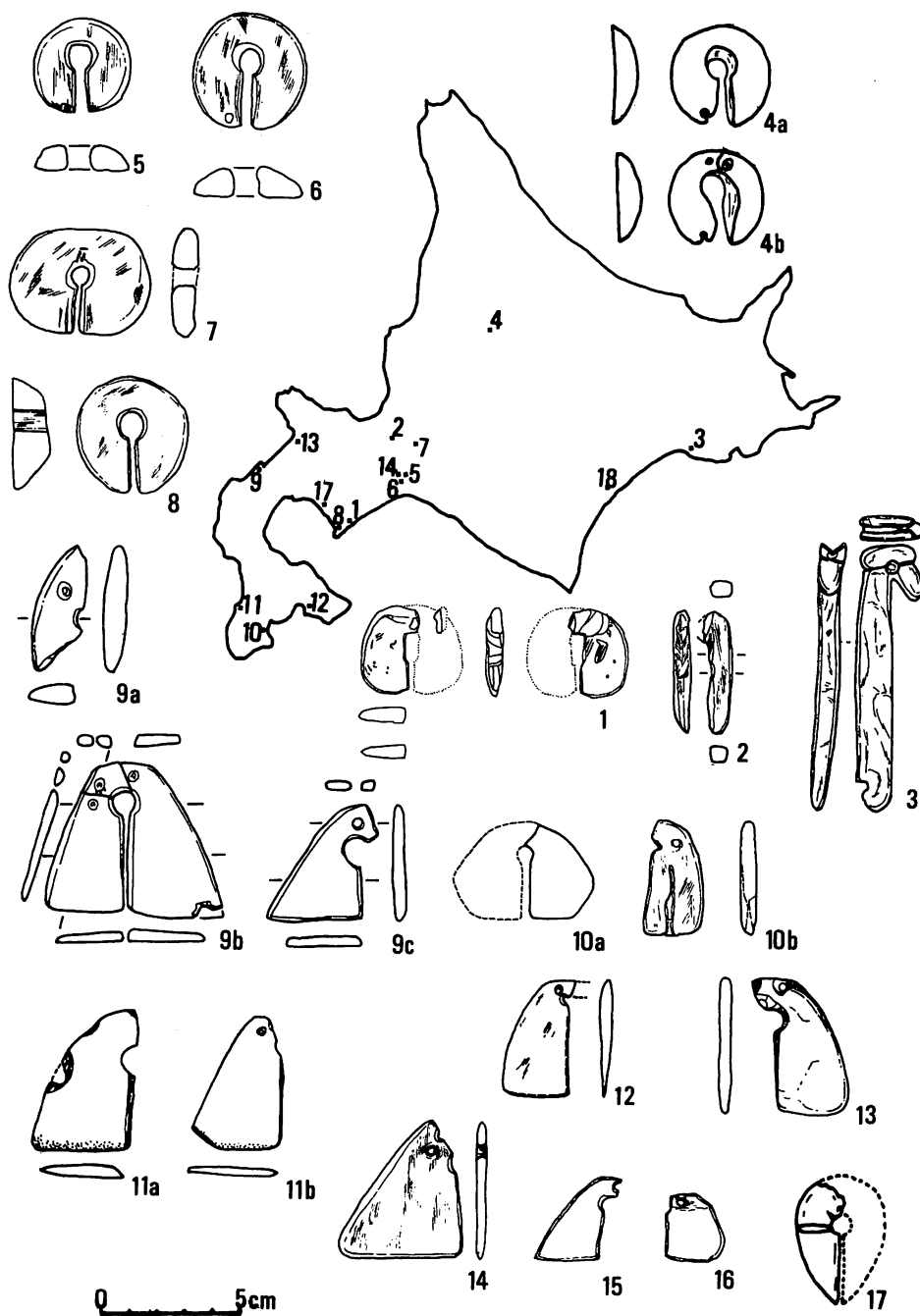


図 XI-2 北海道出土土瑛状耳飾集成図 (番号は表と一致・各図は筆者が掲載文献より再トレースしたものである)

の一点を除いて半欠品である。おそらくは、円形のものが、類三角形のものより小さく、しかも厚いという点で、破損しにくかったものと思われる。破損品の上部、中央孔付近にある小孔は、寿都3遺跡や緑町1遺跡の完形品の例(図XI-2-4b・9b)にもあるように補修孔の意味があることは確かである。しかし、破損品をあえて補修せずに、半欠のまま小孔を穿ち装飾品等として再利用した場合もあったのだろう。出土状態が伴然としないものの、同一遺跡において垂飾等の装身具、祭祀品類が発見されることは、再利用や、祭祀、信仰という面での問題として考える必要もあるだろう。ちなみに寿都3遺跡や森越遺跡などで発見されている垂飾とされるものに、块状耳飾と形態が近似するものがしばしばみられ、再利用、加工技術、形状等の点についても比較検討が必要である。完形品の特異な例としては、緑町1遺跡の一对のものが上げられる。2個とも円形で左脚端に小孔をもち、大きさもほぼ同じである。報告では墓墳からの出土のようで、耳飾として一对をなすような出土例は北海道では唯一である。これに匹敵する例として美々5遺跡と美沢4遺跡のものがある。両者は、美沢川をはさみ直線距離にして約1kmはなれた場所出土している。形状や左脚端にある小孔など、きわめて相似した点が多く、一对の耳飾であった可能性がある。対のものであると考えると、美々5遺跡のものが1個のみで墓墳から出土したことは、緑町1遺跡のものと並んで、块状耳飾が祭祀、信仰に関連する意義を予想させるものである。特にこの3遺跡4個は形状が酷似しており、左脚端の小孔の意味等注目すべきものがある。また、ポンナイ遺跡出土の1個⁽¹⁾は中期の墓墳からの出土とされているが、形状等詳細は不明である。北斗遺跡のものも墓墳出土で、形はちがうが、長脚下部のえぐりが小孔を思わせる。逆に、勝山館、寿都3、森越の3遺跡では、それぞれ複数の耳飾が出土しているが、見た目的一对になるようなものはない。これらの事実から、一对、一個のいずれでも装着された可能性や、分有関係を考えるのは短絡であろうか。材質については、一応滑石が多いようである。美しく、加工が容易な材質を選択したことによるのだろう。

4) 块状耳飾の編年

形状からの北海道の块状耳飾の編年を伴出土器を基準にしていえば、円形に近い平面形をもつものが縄文時代前期前半の土器(Ⅱa-2類)と伴出し、類三角形のものが前期後半(Ⅱb類)のものと伴出する。また、吉井の沢1遺跡にみられる長方形のものや、北斗遺跡の細長い棒状の块状耳飾類似品がⅡa-1類土器(網文式土器等)と伴出していることが注目される。川上B遺跡における早期の土器との伴出は、今のところ道内で最も古い。これらの編年を総合してみれば、芹沢長介氏の早期末から前期にかけての所産とみる考え⁽²⁾に合致する。例外として、入江貝塚の卵形のものが、中期(Ⅲ群円筒上層~北筒式)の土器と伴出している。総合的にみて块状耳飾の形状を、土器を基準とした編年で分類することができそうである。裏を返せば、块状耳飾の伴出を土器編年のための一要素とすることができる。

5) おわりに

以上みてきた通り、今調査で発見された块状耳飾は、その形状や時期において、従来の北海道内出土の块状耳飾と比較しても特殊なものである。特に時期については、周辺部や発見位置で

表 XI-1 北海道出土塊状耳飾一覧表

図 番 号	遺 跡 名	形 状	材質・色調	大きさ 高cm厚cm (復元) 幅cm重g	伴出土器 時期分類	伴出した装身具・ 祭祀品等	文 献 番 号
1	登別市 川上B	肩の張る円形。断面レンズ形でうすい。 中央孔は縦長の角形である。半欠。	薄 橙 色 滑 石	3.2 0.6 (3.6) 3.5	Ib-3	Ib-1類土器片製有孔円盤 " " " 未製品	
2	江別市 吉井の沢1	平面長方形。中央孔は瓢形の可能性あり。 類品なし。半欠。	メノウ質 頁 岩	4.3 0.6 2.5 4.2	IIa-1	棒状黒曜石・線刻黒曜 石・土玉・玉・垂飾	①
3	釧路市 北斗	頭部、頸部に溝をもち、又部に孔がある。 長短の極端な、平たい二脚をもち、長脚の外 端に挟りが入っている。	ヒ ス イ	高 (9.5)	IIa-1	ベンガラを床面にひいた墓墳 に人骨・木炭があり、つまみ付 きナイフ、石斧が伴出	②
4	a 旭川市 緑町1 b	両者とも平面形は円形である。左脚端に小 孔を穿つ。aは中央孔は円形で幅広の切れ 込みをもつ。完形。 bは二つ折で補修孔で直している。中央孔と 切れ込みの境がほとんどみられない。 完形。	乳 白 色 玉 質	3.5 1.0 3.5 0.9 3.5	周辺に シブノ ツナイ 式あり	墓墳の可能性大 ベンガラ・石錐・つま み付きナイフ a・bで一對のもの と思われる。	③
5	千歳市 美々5	平面はほぼ円形で、丸い中央孔と幅広の切れ 込みをもつ。断面台形。左脚部に小孔あり。 完形。	メ ノ ウ	3.4 0.9 3.1 14.2	IIa-2	墓墳P-49より石斧・石 槍・スクレイパー・つま み付きナイフ出土	④
6	苫小牧市 美沢4	5と酷似。やや大きい。完形。	滑 石	3.9 1.0 3.9 18.8	IIb-2	石環・円盤形石製品	⑤
7	栗山町 北学田	平面は長円形を呈す。ほぼ均等の厚みがある。 完形。	安山岩系	3.6 0.8 4.8			⑥ ⑦
8	室蘭市 熊の谷貝塚	平面は円形、断面は台形で厚みがある。完 形。	鯨 骨 または 白 色 石	3.9 1.5 3.9		ボンナイ遺跡のものと 同一とすれば中期墓 からの出土。人骨と伴出	⑧ ⑨
9	a 寿都町 寿都3 b c	やや厚め。中央孔らしきものの脇に小孔が ある。塊状耳飾の頂部と思われるが、他の 製品の可能性もある。破片。 平面は台形で、うすい断面を呈す。深い切 れ込みをもち、中央孔周辺に3個の小孔(補 修孔?)がある。掲載品中最大。完形。 頭部の丸い三角形形状を呈し、中央孔直上に 小孔をもつ。半欠。	滑 石 滑 石 滑 石	0.7 10.7 5.4 0.4 6.5 23.7 (4.2) 0.4 (6.2) 8.9	IIa~IIIa	土器片製有孔円盤・玉・ 垂飾・ペンダント様石器・ 石棒・石枕 玉・垂飾には塊状耳飾 に近似するものが2個 ある。	⑩
10	a 知内町 森越 b	横長で頭部の丸い五角形状である。半欠。 平面は全辺丸味をもつ台形である。中央孔 は菱形を呈しその脇に小孔が穿たれている。 半欠。	薄緑色に 紺の斑点 薄緑色に 紺の斑点	3.8 0.3 (6.2) 7 3.7 0.5 (4.4) 5	IIb~IIIa	玉・垂飾・石環・耳飾 線刻品・土製品 玉・垂飾には塊状耳飾 に近似するものが2個 ある。	⑪
11	a 上ノ国町 勝山館 b	平面は半円形の三角形を呈す。厚みが薄い。 半欠。 ほぼ三角形の平面をもつ。断面はうすい。 切れ込みは深く中央孔は小さい。上部に小 孔あり。半欠。	貴 石 貴 石	4.3 0.4 (6.0) (4.2) 0.2 (5.8)	II b	玉	⑫
12	函館市 サイベ沢	脚部に丸味をもつ台形を呈す。厚みが薄い。 切れ込みは深く、中央孔は小さい。上辺部 に小孔あり。半欠。	緑 色 蛇 文 岩	4.0 0.3 4.8	II b	垂 飾	⑬
13	岩内町 東山	平面は斜辺に丸味をもつ台形を呈す。厚み がない。半欠。	緑 色 蛇 文 岩	5.0 0.4 (5.6)	II b		⑭
14	千歳市 美々4	平面は頭部の丸い三角形を呈すよう、厚み はきわめてうすい。中央孔脇に小孔をもつ。 半欠。	滑 石	(5.0) 0.2 (8.1) 9.4	Ib-4~Vc II群多い	玉・垂飾・石棒・土製 垂飾 その他	④
15	出土地不明	平面形は台形を呈す。切れ込みは深い。中 央孔上2ヶ所に小孔がある。寿都3の12に 形態上近似する。半欠。					⑮
16	出土地不明	角をおとした台形を呈すよう、中央孔は角 孔になる。その脇に小孔がある。片側と残 りの上辺を欠く。					⑮
17	虻田町 入江貝塚	現在北海道で唯一の卵形。薄形である。中 央孔は円形で長い切れ込みをもつ。半欠。	玉 髓	(4.6) 0.3 (3.3)	IIIa~IIIb	黒曜石製垂飾	⑯
18	浦幌町 共栄B	環状弧状の破片で、報文では一端のみの破 損で一端はオリジナルな面だという。 同 上		幅 (4.4) 幅 (5.0)	I 群	垂 飾	⑰

※右覧の文献番号は別掲(表註文献)で示してある。

ある落ち込み内の土器が縄文時代早期（特に中茶路式を指標とするⅠb-3類が多い）であることや、同時出土した有孔円盤2点が、やはり縄文時代早期でも東釧路Ⅲ式を指標とするⅠb-1類土器片の加工であることから、この块状耳飾が、縄文時代早期の終わりごろのものと考へざるを得ないのである。

(1)文献⑧に図があり、熊の谷貝塚出土とされている。⑨にあるポンナイ遺跡とは、地理的に近いが、図は掲載されていない。とりあえず今回は同一のものとして考えた。

(2) 芹沢長介 昭和40年「周辺文化との関連」『日本の考古学Ⅱ縄文時代』河出書房

参考文献

樋口 清之 昭和8年「块状耳飾考」『考古学雑誌』23-1・2

藤田富士夫 昭和45年「攻玉遺跡からみた块状耳飾の編年」『玉』日本玉研究会会誌1

上田 耕 昭和56年「九州における块状耳飾について」『鹿児島考古』15

表註文献（表の右覧にある文献番号で示したもの）

- ① 北海道埋蔵文化財センター 昭和56年度『吉井の沢の遺跡』
- ② 釧路市教育委員会 昭和50年『釧路市北斗遺跡調査概要』
- ③ 旭川商業高等学校郷土部 昭和36年『旭商郷土部ノート』No.5
- ④ 北海道埋蔵文化財センター 昭和55年度『美沢川流域の遺跡Ⅳ』
- ⑤ 北海道埋蔵文化財センター 昭和54年度『フレベツ遺跡群』
- ⑥ 栗山町教育委員会 昭和42年『栗山町の文化財』
- ⑦ 空知地方史研究協議会他 昭和44年『空知の文化財第一集』
- ⑧ 北海道出版企画センター 昭和58年『河野常吉ノート考古篇2』
- ⑨ 室蘭市 昭和56年『新室蘭市史第一巻』
- ⑩ 寿都町教育委員会 昭和55年『寿都町文化財調査報告書Ⅱ』
- ⑪ 知内町教育委員会 昭和50年『森越』
- ⑫ 上ノ国村教育委員会・江差町教育委員会 昭和30年『桧山南部の遺跡』
- ⑬ 市立函館博物館 昭和33年『サイベ沢遺跡』
- ⑭ 岩内町教育委員会 昭和33年『岩内遺跡』
- ⑮ 犀川会 昭和8年『北海道原始文化聚英』所収
- ⑯ 名取武光・峰山巖 昭和33年「入江貝塚」『北方文化研究報告』第十三輯
- ⑰ 浦幌町教育委員会 昭和51年『共栄B遺跡』